

2013年10月27日礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 13 章 31～35 節

説教：ひなを翼の下にかばうように

1 イエスとエルサレム

1) 嘆くイエス

イエスは 34 節で「ああ、エルサレム、エルサレム」と言って、この町のことを嘆いています。19 章 41 節には、「エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いた」とあります。イエスはエルサレムに対し特別に関心を寄せられ、涙を流すほどにエルサレムのことを心配しているようです。なぜエルサレムがそれほどに大切なのか。それは私たちにどんな関係があるのか。今日はそこに目を留めていきます。

2) パリサイ人の脅迫

パリサイ人がイエスにこう言っています。「ここから出てほかの所へ行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうと思っています。」ヘロデは、当時のイスラエルの国主でしたが、聖書の律法に反したことを繰り返し洗礼者ヨハネに厳しくその罪を責められました。そのためヨハネは、牢に投げ込まれ、最期は首をはねられ殉教します。その後、イエスの評判がヘロデの耳に入ってくると、ヨハネが生き返ったのかとおびえるようになります。ですからヘロデがイエスのこと殺そうとしていたというのはおそらく事実でしょう。では、パリサイ人はイエスのことを心配し、親切でこんなことを言ったのでしょうか。

文字だけ見ると丁寧な言葉遣いで語ったかのようにも読めます。でも日頃からパリサイ人はイエスのことをできれば殺してやり

たいと考えている人たちですから、親切心で言うわけはありません。これは脅迫です。「殺されたくなかったなら、エルサレムには近づくな。」刃物をちらつかせていたかどうかはわかりませんが、それに近いものがあったでしょう。

3) エルサレムで死ぬ

私は反社会的勢力の方々とおつきあいしたことはありませんが、映画などで彼らのお姿を拝見すると、このようなことを言われたらかなり恐いだろうと思います。もちろんイエスはこんな脅しに屈する方ではありません。23, 33 節で次のように言います。「行って、あの狐にこう言いなさい。『よく見なさい。わたしは、きょうと、あすとは、悪霊どもを追い出し、病人をいやし、三日目に全うされます。だが、わたしは、きょうもあすも次の日も進んで行かなければなりません。なぜなら、預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはありえないからです。』」

もうすぐ死ぬとわかっている場所に向かって進んで行く。考えただけでも足がすくみます。けれどもイエスはエルサレムで死ぬことにこだわります。

2 エルサレム

1) 拒む人々

なぜそこまでこだわるのでしょうか。34 節を読みます。「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人

たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らをいくたび集めようとしたことか。それなのに、あなたはそれを好まなかった。」

人が罪を犯して以来、神は何度も預言者をイスラエルに遣わし、神に立ち返るようにと呼びかけました。旧約聖書にはそのようなことがいくつも書かれています。イエスが来られる直前にも、洗礼者ヨハネが預言者として遣わされました。ヨハネは人々に向かってこう叫びます。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのかれるように教えたのか。それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」(ルカ3章7,8節)多くの人々はこれを聞き、ヨルダン川に入って悔い改めのバプテスマを受けました。どんな罪を犯しても、私たちが神の前に悔い改めるなら罪のさばきの日である神の御怒りからののがれることができる。これがヨハネを初め預言者たちが語った救いのメッセージです。イエスの言葉のとおり、神はめんどりがひなを翼の下にかばうように、人々を救おうと何度も努力を重ねてきました。

ところが、ヨハネのことばを聞いて苦々しく思う人たちもいました。ヘロデもそのひとりです。ヘロデだけではない。パリサイ人、律法学者、祭司たち、名だたる指導者もみなヨハネの声に耳を貸しません。これらの人々はみなエルサレムを活動の拠点にしています。

そうすると、イエスにとってエルサレムとはどんなところになるのか。そこにはダビデやソロモンが基礎を据えた神殿があります。神殿は、神の子であるイエスにとって、ご自分の住まわれる家そのものです。神が住まわれるはずの神殿では、なんと神から遣わ

された預言者たちを拒む人々が力をふるっている。それがエルサレムでした。

2) 家は荒れ果てたまま残される

35節に「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される」とあります。「あなたがたの家」とは、エルサレムにある神殿のことを指すと考えられています。直接には石で作られた建物のことです。けれども、聖書のほかの箇所を見ると、神殿とはイエス・キリストのからだをも指すのだとも言われています。

そうしますと、「家が荒れ果てたまま残される」とは、どんな意味になるか。主のみからだに釘が刺され、十字架につるされ、そこで死んでいかれることをほのめかしているのだとわかります。

パリサイ人は脅迫しました。「エルサレムに行ったらいのちがないと思え。」イエスは答えます。「わたしはそこで死ぬために行くのです。」

3 主の御名によって来られる方

イエスがエルサレムで死のうとしていることはわかりました。でもなぜイエスはエルサレムにこだわるのでしょうか。このことを視点を変えて別の面から考えてみます。

ある方はこんな疑問を口にします。「聖書では神は愛ですというけれど、愛の神であるならどうして、今世界中で戦争が起きてそこで殺され、ますますひどい世の中になっていくのを止めようとなさらないのか。」「今、私の愛する家族が死にかけている。聖書に書かれていることがすべて本当だというのなら、神は奇蹟を起こして家族を助けることができるはずだ。でも何も起きない。」

神は私たちがどんなに苦しんでいても関心がない。冷淡な方なののでしょうか。それとも、神はこの広い宇宙を御支配することに忙しく、私たち人間のことなどかまっているひまがないというのでしょうか。

でもダビデはこう言っています。詩篇 8 篇 3, 4 節。「あなたの指のわざである天を見、あなた整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。」

神はこの大きな宇宙の中で、不思議なことにちっぽけに思える私たち人間に特別な関心を寄せておられます。神はこのひどい世をなにもしないただ見ていたのではない。いやむしろ、神は何度も私たちが助けようと手を尽くしていた。神は預言者を何度も遣わし神のメッセージを伝えようとしました。あなたがたは間違った道を歩んでいる、そのままではあなたがたが滅んでしまう、だから私が示す正しい道を歩みなさい。正しい道を歩むならあなたは幸せになれる。

イエスは言われます。「めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを行くたび集めようとしたことか。」

空の鳥でさえ、自分の子どもであるひなが寒さに震えているとき、敵に襲われそうになっているとき、自分の翼でひなたちをおおい、暖め、守ろうとする。まして、人間にはどうなのか。「あなたがたは、鳥よりも、はるかにすぐれたものです」と言われているのです。だったら、鳥とは比べものにならないくらいにすばらしいことを神はなさるはずではないですか。

いったい何をしてくださるのでしょうか。今日の箇所を見てください。イエスは、ご自分

を憎み、殺そうとする人々が集まるエルサレムに向かおうとされます。神の子である方が、ご自分の故郷エルサレムで人の手にかかり殺されていきます。なぜそうするのでしょうか。憎む者の手にどうしてかからなければならないのですか。

もし私たちがイエスの立場であればこう考えるのではないですか。「神が差しのべた救いの手を拒むような人たちのことなど放っておけ。彼らにこそ厳しいさばきを下すべきだ。彼らの手にかかって自分が死ぬ？とんでもない。」そう思うのではないですか。

ところがイエスは、神を憎む人々の手にかかり死ぬ道を選ばれます。これはどういうことですか。神は、ご自分を憎む者をも救おうとされます。ご自分を拒む者をも、翼の下にかばわなければならないと考えているのではないですか。

ヘロデは、私たちにとって他人でしょうか。ヨハネが、ヘロデの悪事を指摘したとき、ヘロデはヨハネを憎み殺そうとしました。私たちだって同じではないですか。自分にとって隠しておきたいこと、都合の悪いことを誰かに指摘されたらどう反応しますか。素直に受けとめられますか。もし不機嫌になったり、複雑な感情をいだくようなら、私たちも立派なヘロデです。ヘロデと同じように、主を殺そうとしているのです。めんどりがひなを翼の下に集めようと神が遣わしてくださった方を拒んでいるのです。

今、世界で深刻な問題が起きているのは神の責任でしょうか。いいえ。すべて私たちが神の救いの手を拒んだ結果です。神は、もっともっと奇蹟を起こすべきなのではないでしょうか。いいえ。もうすでに十分な奇蹟が与えられているのではないですか。神の御子が罪人の手

にかかって十字架で死んでくださる。これ以上の奇蹟があるでしょうか。

鳥にたとえば、めんどりがひなを翼の下にかばうのです。神の怒りはだれに降るかわかりますか。ひなである私たちにではありません。親鳥の上にふりかかります。親鳥が死ぬことで私たちは救われる。

神はこのようにしてまでして、私たちを愛そうとされます。私たちをおおってくださる翼の恵みを思い起こします。